

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと 風

第三十九号 (二〇〇九年八月)

風に吹かれて (09 8)

白井啓治

『もう若くはない恋雨のいそぎ降れ』

まだ自分自身の対岸が確りと自覚できないでいると、どうしても焦り、とは違うがそれに似たような情態になってしまうのである。いろいろ思ってみても、青年期のように「兎も三兎も同時に追いかけて、可能性に挑戦してみることはやはり叶わない。

最後に一つ、これが私だ、といえるであろうものに挑戦してみているのであるが、その氣力に体力がついていけない。そうなるかどうかしても、恋雨よいそぎ降れ」などと呟いてみたくなるものである。

六月、七月号と詩を載せたところ、古里の現状と合わせて読むととても悲しく寂しい詩でした、というメールを頂いた。特に七月号に載せた「寒蝉」は、希望というものの存在を否定するような印象を与えるものであったらうと思う。しかし、ふるさとの現状を、恋(明日の希望)を希求する舞歌に表現し、そこに警鐘を鳴らそうと思って詠むと、やはり「寒蝉」がイメージされてしまう。

今月は、落ち込むような悲観を持たれないような詩を紹介してみよう。昨年夏の公演に発表した

「霞ヶ浦讃歌・風の姿」に挿入したものである。

## “ 歎びの舞歌 ”

風よ

あなたは物陰に暮らす私達に

空の青と

海の青と

森の緑の中に

歎びの暮らしを創ることを

教えてくれました

風よ

あなたは流れる舞の姿

だから私は

あなたに

感謝を舞にして捧げます

ひびけ心の声

とどけ心の声

私は大地の舞姫

風よ

あなたは暮らしの恵みを教えてくれる

流れの舞姫

この歌は、豊かな霞ヶ浦沿岸に自然と共存しながら暮らしを創っていた縄文人が、大陸からやって来て我こそが日本国唯一の大和民族などと勝手に

に称し、日本国の全部を我が物にしようとする輩の戦の大将である黒坂命、建借間命に滅ぼされる以前、縄文人が自然に感謝する舞歌として詠んだものである。大和民族こそが生粋の日本人であると信じ込んでいる人達には、些かショックかもしれないが、大和民族なんて朝鮮民族、大陸系民族、南方系民族の混血で、特に朝鮮民族の血が中心になっていると言える。つまり大和民族とは朝鮮系の混血民族なのである。この私だつてそうである。純粋の日本人はというと、些か断定することが難しいが、縄文人の血をひくアイヌ民族ということになるのである。

世界で一番美しい表現力を持っていると言われる日本語も、中国から渡来した漢字に、朝鮮語の文法と純粋日本語と言えるかもしれないアイヌ語が融合し、生まれたと言える。

歴史や文化についてを、垣根を取り外し、固定観念を捨てて考えてみると実に面白く、そこには未来への確かな道標としての物語が埋もれてあるものである。

さて、今年の六月に「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える風の会」の会報も丸三年をクリアし、四年目に入った。同時に少し遅れて立ち上げた妹分の「ことは座」もこの十月で丸三年となり、四年目に入る。一つの活動に立ちただかる三年の壁というのは、実に高いものがあり、揃って三年をクリアできることは、小生としては感慨ひとしおである。

そこで十月には、合同で三周年記念に「ふるさと物語フェア」と題したイベントでも開催しようかと思っている。何たって風の会とことは座には、色々な形で物語が降り止まぬ会なのだから。

志筑の磨崖仏は：

小林幸枝

先日、十月のことは座三周年記念公演のための脚本ハンティングに、ことは座の関係者とオカリナの野口さん、ふんどし侍の高木さん達とで、かすみがうら市の閑居山にある磨崖仏に行ってきた。

脚本のハンティングには、残念ながら閑居山の歴史をまとめて下さった打田さんは用があつて御一緒できなかった。

閑居山の磨崖仏には、過去5、6回行っているのですが、行く度に磨崖仏が風化し仏様の姿が失われてしまっている。磨崖仏の側の急斜面には、幾体もの小さな石仏が置かれてあるのだけれど、石仏のほとんどの頭が欠け落ちていた。見ようによっては、頭部の無い石仏を安置したとも思っています。県指定の文化財になつてはいるのですが、このまま放置されれば、いずれは「ここに磨崖仏がありました」という看板だけになつてしまつてはいけません。

この磨崖仏は、醍醐寺から願成寺に来た高僧、乗海が彫つたと伝えられていますが、乗海なる僧については何も分かつていないのだそうです。打田さんの資料によると、乗海は中将法印とあるので、高級公務員で途中から出家した人物かもしれない、とあります。そして、法印とは大和尚のことをいうのだそうです。願成寺に乗海法印が来てからは醍醐派の優れた僧侶が訪れるようになり、真言密教の拠点になつたのだそうです。ただし、乗海が何故閑居山の岩肌に磨崖仏を彫つたのかは伝えられていないそうです。

この閑居山は、金を掘つたともいわれており、

磨崖仏のある岩山にも幾つかの岩穴があり、その壁面にも仏様が彫られています。奥まで入つてみたかったのですが、怖いのと蜘蛛が大嫌いなので、入口を覗いただけで止めにしました。

今回、兼平さんに案内されて初めて知つたのですが、磨崖仏の岩山を少し進むと、大きな石像と滝があり、それこそ滝に打たれると心が洗われるように思われました。滝の下で、野口さんが即興でオカリナを奏き、ふんどし侍の高木さんがディジリドゥを鳴らしコーポレーションしてくれました。私も早速、閑居の舞を舞いました。

舞を舞いながら、この磨崖仏をモチーフにどんな脚本が書きあがつてくるのかと色々想像をめぐらしてみました。悲しい恋の物語になるのか、それとも怨み？ 哀しみ？ 妖怪？ ……

十月は、ことは座の創立三周年記念公演となります。この風の会の三周年記念と合わせてのイベントとなります。大切なふるさとの文化遺産がこちらで見捨てられ、今にも失われようとしています。風化の進む磨崖仏に、新しい希望の物語が生まれ、演じられたらと思っています。

歴史ガイドに同行して(13) 兼平ちえこ

昨年、平成二十年四月、五月、六月の各月一回行われた常陸国風土記を歩く会の皆さんへのご案内は、六月に行われた最終コース、柏原池、染谷村上地区に入ります。今回は、(19) 柏原池、(20) 大乗妙典日本廻国供養碑(だいじょうみょうてんにほんかいこくくようひ)、(21) 寶持院をご紹介します

よう。

(19) 柏原池

石岡には台地を潤す三本の川が流れています。筑波山から加波山にかけての広い地域を源とする恋瀬川。旧八郷の難台山一帯を源としている園部川。そして龍神山周辺を水源とした山王川。その山王川の水源には龍神山周辺に降った雨水が細流となつて池となつた柏原池があります。

江戸時代の古絵図には農業用水のため池として描かれており、国府、府中の水田を満たし、まちを支えて来ました。古くから、柏原池は、背景の龍神山とともに石岡の人々の憩いの場として親しまれていました。

明治の記録「石岡誌」によりますと「龍神山、当町の西端にして、染谷村上に跨る。四時の風光すこぶる絶佳にして、一度その山嶺に登らんか。

東南の眼界広く、遙かに霞ヶ浦を望み、西北は筑波山脈を限り沿麓の諸村点々眼中に落つ。その奇観言つべからざるものあり。されば、春は桜花に、秋は紅葉に遊賞するものすこぶる多し」とあります。しかし、それも「昭和の肖像」になりますと『石岡の自然の中で、柏原池からの龍神山を望む風景ほど変貌したものはないだろう。標高210メートルだった龍神山は、現在では碎石で中央が亡くなり標高163メートルに縮んでいる』となつてしまっています。人の心で、人の手で変えてしまった美しい自然、風土。悲しい残像の光景となつてしまいました。

柏原池は、昭和六十年に柏原池公園としてオープンしました。平成元年三月には、山口県宇部市常盤公園で飼育されていた黒鳥、白鳥を同市の厚

意により譲り受け、現在では水鳥、鷺鳥、オシドリ、アヒル等も住みつき、滑稽さと、あどけない仕草に歓迎され、癒されます。また、遊歩道に並行して芝生の中には、東京都新島本村から寄贈されたモヤイ像が親しみをこめて、ウオーキング、散歩のみなさんをお迎えしています。

柏原池東側には、石製の弁財天社が鎮座している。昔は祭りも行われたが現在は廃止されているそうです。

#### (柏原池の若侍と美女の伝説)

府中大塚氏の時代、柏原池には絵にかいたような美しい女性が住んでいたという噂に若者達は一度逢ってみたくてという好奇心で一杯であった。ある夜、美女が姿を現し、音色の美しい笛の音と共に姿を見せた美男の若侍と寄り添い、何を語り合うのか秋の夜は更け、池の水面は波一つないようであった。

翌朝若侍は死体となって水面に浮かんでいたという。美少女は龍神山の大神の化身で、若侍はそれに魅せられて死んだのである。里人はこれを憐れんで、ねんごろに葬り、祠を建て、冥福を祈ったという。(石岡の歴史と文化、石岡市歴史ボランティアの会編より)

どうぞ春爛漫の桜花の時に、秋、鈴虫の唄う月夜の水面、お出かけ下さい。くれぐれも美少女には目もくれずお気をつけくださいませ。

#### (20) 大乗妙典日本廻国供養碑

柏原池公園より風土記の丘へ向かう、柿岡街道との信号のある十字路を渡り、風土記の丘への新道を進む途中、明るい茶色壁の民家より左に折れ

る。谷津田が広がり、染谷地区の民家が点在。柏原池公園から徒歩25分位で染谷集落センター駐車場へ到着。右カーブを進むと、まもなく供養碑案内が右側にあることを示している。

市指定有形文化財(歴史資料)、昭和五十八年七月二十八日指定。所在地、染谷1の111の2。

この碑に刻まれている六十六部(六部)とは、法華経を書写し、全国六十六箇所の神社仏閣をめぐって、その法華経を奉納する行脚僧をいう。その起源については明らかではないが、中世から近世にかけて巡礼の流行ともなつて生じたものと考えられる。伝承では、この碑は須賀田庄右門が自ら日本廻国の成就を記念し、元禄七年(一六九四)に建立したものとされている。現在もこのあたりは六部台と呼ばれ、六十六部との関連が知られる。

大乗妙典廻国供養碑で詳細な日本地図が線刻されたものは、全国的にもめずらしい。(石岡市教育委員会案内板より)

個人のお墓の中に置かれてありますのでご迷惑となりませぬようにご覧下さい。

#### (21) 寶持院

供養碑より下り坂進むと十字路、左へ。ほどなくして左側に金剛山寶持院の石門。

所在地、染谷986。山院寺号、金剛山密厳寺寶持院。宗派、真言宗豊山派。本尊、聖観世音菩薩。文安元年(一四四四)二月、宥辨上人の開基。何回かの火災に会い京保一七年(一七三二)高根台の地から現在地に移転。幕末の天狗騒動の時にも火災に遭った。府中城主皆川山城守の弟の墓がある。また、往時の遺跡を伝える多数の供養塔があ

り、染谷、高倉、栗田等の善男善女による観音信仰が高まったことを窺い知ることができる。今回はこの辺でひと休みといたし、次回は染谷鹿島神社、波付岩へと進めてまいります。

只今 宇宙遊泳特訓中 赤とんぼひとり

ちえこ

## 補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡 2 1 5 8 6  
電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

明日の予定は、竹の子退治と展示物を見に行く事だった。天気が良くなることを願っているが、雨が降っても変わりはない、と決めていたが順調にいかない。

夜争いが起きてしまった。戦場と化した部屋には異様な空気が漂っている。朝から雨は降っている。重い空気を溜っほさが交り淀んでいる状態だ。

「何の事から始まったのかな」

と考えるがそこには情けない自分がいるだけで、何度も繰り返してきた。

「私ってなんて馬鹿なんだろう」

と思う事はしばしばあっても、身についていないのだ。常に「私は…」という強い自分と「俺は」と相手とのぶつかり合いだった。

いいんじゃない「俺は…」と「私…」でしばらくやっていく事だと肯定すると楽になった。小降りになったことを幸いに家を出た。出る機会を狙っていたと思われるかな。不貞腐れて家出したなと、思われるか等つまらない事が心を過ぎっていたが、それでいいという気持ちで出かけた。

竹の子退治が始まった。あちこちの野山でみられる状態、竹の需要もなくなった今ただただ邪魔扱いされるばかりだ。鎌で切り倒して行く。今こつとして遣っつけておかないとあとあと大変な労力が必要とすることになる。戦いに挑むかのようにばっさばっさとやっつける。しっかりと汗を流した。汗と一緒に心の奥に潜んでいた物が流れ出ていくみたいだ。溶け始めた氷水の美味しいこと、ペットボトルから喉へそして体中が、ブルツとした。

さあ時間は大丈夫かな。急いで展示場へ向かった。今日が最後の日だから何としても間に合わせたい。間に合った。閉館四十分前だった。「子安神社」安産、子育ての名社と女人信仰という展示である。ここに紹介されている子安神社は照

光寺街道の所で部落の女達がお参りする場所として紹介した所だ。昔の女達が新しい生命を授かる為に必死の願いだったことが伝わってくる。自分の生命と取り替えになるかもしれない厳しい現実もあった。そういう中で支えあつた女同士の絆の強さ、信仰心に感動しながら見ていった。そこに遠い日の自分の姿をみていた。健康に恵まれ順調に子供を産むことが出来た。育つた。子供達はそれぞれの生活の中で頑張っている。思えば忙しい中でも二人で楽しい子育ての日々があつた。懐かしい。今は空き家になつた様な所で、抜け殻になつた様な二人しっかりとらしくなくちゃと自分に言い聞かせ展示場を出た。

雨はやんでいた。風と一緒に走つた。湖浴いの田は緑でいっぱい。稲一株一株はすっかり遅くなつて水面を覆っている。その緑は早苗の頃とは違ふ美しさだ。干拓は右側が蓮田、左側に稲田が続く。誰もいない。静かだ。農道に座つて素足になつた。気持ちがいい。雨に濡れ靴下に包まれて潤いていた皮膚に夕暮れ時の空気が沈み込んでくる。仰向けになつて空を見上げた。雲がいく。八木の台に十二夜の月が見えた。山崎の森の上に傾いた陽が見える。道路でも車に全く合わない。向こう岸に私の部落が見える。

「何をしてるのかな」

一寸気にはなるが、そんなに急ぐこともないが帰るほかない。

## ギター文化館

### 2009 CONCERT SERIES

- 9月 6日 村治奏一 ギターリサイタル  
 9月 13日 ベルタ・ロハス ギターリサイタル  
 9月 20日 ラファエラ・スミッツ ギターリサイタル  
 9月 21・22日 第3回フラメンコフェスティバル  
 10月 11日 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル  
 11月 1日 長谷川きよしコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

### 工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で…、大好きな雑木林に一摘みの土を分けていただき、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜 2 4 6 5

TEL 0299-55-4411

農道に入ると私の前に一台のトラックが止まっていた。畔にお爺さんがいた。

「遠いとこ、きつかったね」

「遅くまでご苦労さまですね」

挨拶の後の会話は相手を気づかい合う言葉だった。話によると畔の草刈りを終えて帰ろうとしたら、エンジンがかからなくて一時間位経ってしまつたという事だった。家に連絡をとってあげる為に近くのストアアの公衆電話に向かった。若い人が来て車も動いた。お爺さんと若い人のやりとりを見ながら、暖かいものを感じた。節くれ立つた大きな手でお礼にとお茶をくれた。優しい余韻が残っていた。私は昨夜から播りも消えていくおもいで恋瀬川にむかつて走つた。稲田が広く続く。薄暗くなった周囲を見ると西空は低い雲が夕陽を隠している。南の方には薄い雲が急ぎばやに走っている。そこに月を高く見え隠れしている。他人にはどうして優しく出来るのだろう。私って偽善者なのかな。家にいる人だって元は他人なんだから旨いく様にしなければ、あのお爺さんに合つたことが、今までのもやもやを吹き飛ばしてくれた。そうだ。少しでも早くと思い、騒音と灯の流れの中を急いだ。家に着いたら「ごめんね」の言葉が出る様にと心が弾んだ。坂を登りながら振り返つた月は雲がすっかりとれて明るかつた。

さあ着いた。その一瞬「ただいま」の声は低くなっていた。今迄のおもいとは別になつてしまつた。全く救い難い私。擦れ違いに二階に行つてしまつた彼。「折角謝るうと思つていたのに…」と又「我」が出て来たのをぐつと堪えて、頂いたお茶を飲み始めた。無性に喉の乾きを感じてあつという間に一本平らげた。お茶を飲んでいる間に素直になつ

ている自分に気がついた。そうだこの気持で「お詫びをしよう」一つ二つ書き出してみた。今やつていない事が七つ出てきた。可笑しいが彼の為に、自分の為に「詫び状」を書くことにした。数え七十歳になる節目にこれはいい自画自賛して一人得意になつて居るが、受け入れられるか、やりとげられるかと思うと不安だ。

一、庭草はある程度とる

一、物を丁寧に置く

一、野菜を育てる

一、部屋の資料を整理する

一、あたりまえの会話をする

一、金を大切にしておく

一、物を乾して暖かくする

寺の鐘が遠くに聞こえて目が覚めた。夕べ書いた「詫び状」を読み返した後、あのお爺さんのことを思つていた。八十五才といつていた。長い人生を超えてきた姿をあの柔和な表情の中に見る事ができた。お家で待つていたお婆さんはどんな人だろう。まあよく可愛い年とつた人だろうと想像した。私もそんな風に年を重ねていきたい。あのお爺さんに合つたことは、私に大きな転機を与えてくれることになると思つて居る。

この「詫び状」必ず実行していきます。八十才を過ぎたらお互いの為だけ時間をつくり、この詫び状どおり生きていけるでしょう。それまで十年ちよつとは他の為に時間を使いましょうこれも「我」でしょつか。実行出来る日々のために健康でいきましょつ。

引つ越し

松山有里

約三年弱住んだ瓦谷を離れることになった。今度住むことになったのは住所としては小野越、でも班は菅浦沢だ。同じ旧八郷町内で、瓦谷からは車で約三十分弱。スワラジ学園でお世話になつた合田さんのご紹介や、いろんな方のご尽力で、家をようやく見つけることができた。本当に心から感謝します。ようやく契約を済ませ、ついに今度の日曜日、引つ越しまで漕ぎつけた。ちよつどお話をいただいたのは、畑が冬の眠りから覚めて動き出した三月。それから農繁期にちよつど重なるようにいろんな引つ越しに関わる算段が目白押し。こんなに畑に集中できなかった農繁期は今まで初めてだ。田んぼまで手をつけていたので、これも更に変な事になつた。野菜を買つてくださつて居る会員さん(野菜を買つてくださった方は「ふたばと共に自給する会」の会員さん)になつてもらつて居る。には多大なるご迷惑をおかけしたかもしれない。草がボーボーに生える畑を横目に挨拶やお願いに走り回つた。ついに引つ越しができる日が来るとは！夢のようだ。というのは自分たちで言つのもなんだが、本当に美しいところだからだ。初めて訪れた時、ちよつどぼんやり春霞がかかるなか、山桜が向かいの山々に点々と咲き、家の前から眺める風景は、「桃源郷」という言葉がびつたりであった。眼下には小さい棚田がいくつも見える。家のまわりには花を咲かたり、実を成らせる木々、季節ごとに咲く花々。ふき、うど、みょうが…。ここに住んでいらした家主さんご夫婦がいかにここでの毎日を、大切に一日一日暮らしていたのかがよくわかる。



『寿命』とは、「命のある間の長さ」と、辞書には書いてあるが、生き物だけではなく、道具や、内閣など、耐用年数などの意味にも使われる。

今回は、この寿命というものを、人類という、個体ではなく「種としての寿命」という観点からじっくり眺めてみたい。

自分や近親者の個体の寿命については、ぜひ長生きをして、天寿を全うしたいと願うものだが、種の寿命などについては、そんなものは神のみぞ知る……と、曰ころ誰でも、あまり気にはしない。

しかし、個々人の日頃の生活態度が、種全体の寿命に、何らかの影響を与えているとしたら、これは穏やかではない。一人ひとりに責任があるなどと言われたら、なお大変だ。

人口が増えると、食糧確保のため森林を切り開き、農耕や牧畜を行う。すると肥沃な表土は流失し、収穫が激減する。食糧難から争いがおき、文明が滅亡していく。こんな現象は世界のいたるところにみられた。現在、アマゾンの森林伐採は、人類の存亡にかかわる重大問題である。太陽の光が降り注ぎ、地球の生命を育み、人類はその恩恵で今日67億人まで人口を増やした。しかし人類は、毎年、太陽の恵みの1/3年分のエネルギーを消費しているという。不足分は過去の化石燃料などである。人口過剰とエネルギーの過剰消費が、人類の種としての寿命を縮めることになる。

さて前報でも述べたが、我々人類の最初の祖先は、今から700万年前、類人猿と枝分かれし、アフリカの森林からサヴァンナへと進出し、直立2足歩行をはじめた。化石考古学は、直立2足歩

行をした証拠のある骨の化石をもつて、「化石人類の骨」として承認する。直立2足歩行を始めた我々の、初代のご先祖様は、誇らしげに拳を天に向かつて突き上げ、高らかに人類誕生宣言を、宇宙に向つて発進したかもしれない。

以来、人類の祖先は、幾度も環境の激変に遭遇した。例えば、火山噴火による煤煙は、何年間も空を覆い、地上まで太陽光は十分に届かない。気温は下がり、植物は活力を失い、動物は慢性的な飢餓状態となり、多くの種に絶滅をもたらした。

(我々ホモ・サピエンスも7万年前、スマトラ断層上のトバ山噴火で、絶滅の危機にさらされた)。

更に過去5億年間に、全生物の90%前後が絶滅する事件が5回もあつたという。火山噴火は、空気中の酸素濃度が下がり、有毒な亜硫酸ガス(二酸化硫黄)濃度は上昇し、そのためオゾン層は破壊され、有害な紫外線は、ストリートで地上に届くため、DNAに傷がつく。強い紫外線にさらされるとメラノーマ(悪性黒色腫)ができ、全身に、このがん細胞は転移する。だからオゾン層の破壊は怖い。浅い海で植物がセッセと生み出した酸素が、成層圏以高でオゾン層となる。そのオゾン層が二酸化硫黄などで破壊される(現代はフロンガスなどが主な破壊要因)。すると、地上では生物は生存できなくなる。海で繁栄した生命が、30億年も陸上に進出できなかったのはそのためだ。海の中は、水で紫外線は弱められるので、DNAにそれほどダメージは受けにくい。

6億年前、オゾン層がやっと出来上がってきたので、まず植物が、上陸を慣行する。次いで、我々の祖先にあたる脊椎動物の両生類が、鰓(えら)を肺に変え、鱗(ひれ)を足に変え、やっと上陸

に成功するのが、今から3・6億年前である。

海で脊椎動物が誕生するのは、今から5億年前である。以後、魚類、両生類、爬虫類、哺乳類と進化してきて、今から6500万年前、直径10kmの小惑星が、中米ユカタン半島に落下した。そのため全世界の恐竜が一瞬にして絶滅した。他人の不幸のおかげで……というと変だが、恐竜絶滅のおかげで、それまで恐竜の陰で怯えていたネズミ大の哺乳類の祖先は、一気に爆発。恒温の哺乳類の天下が到来する。

こうして哺乳類の中の食虫目(モグラの類)の中から、我々の祖先に当たる霊長類へと進化を遂げ、更に類人猿へと発展し、ついに人類の最古の祖先「サヘラントロプス・チャデンシス」へと進んでいく。そして、チャデンシスから、我々現生人類を生み出した「ホモ・エレクトウス原人」まで、700万年間に、化石人類は、実に9段階のヴァージョンアップを重ねて、やっと我々、ホモ・サピエンスを生み出す。従って一つの種が誕生して滅亡するまでを単純計算すれば、その寿命は平均78万年ということになる。実際は、170万年続いた種もあつたし、ネアンデルタール人のように、27万年という短命の種もあつた。我々ホモ・サピエンスは、ネアンデルタール人の弟分だから、仮に、同じ寿命と仮定したら、種としての残り寿命は、あと7万年ということになる。

愚かにも、人類が、地球環境をこのまま汚染・破壊し続けられれば、我々の種としての寿命は、あと1万年持たないと未来学者は言っている。人類にも、智慧があるのなら、このような大量消費生活に終止符を打ち、環境汚染要因を排除し、スローライフにシフトチェンジしなければならぬ

ことぐらい、すぐ分かるはずである。愛しい子供達のためにも、再生可能な生活態度に戻らないと過去の多くの化石人類と同じ、はかなく消え去っていく運命となるであろう。

環境汚染で重大なのは、性ホルモン様物質の環境ホルモンだ。男性の精子造成機能が全世界で、極度に低下(数・活力・奇形)している。その他、発がん物質や農薬汚染など、数えきれないほどの環境汚染。正に人類が、自分の手で、自分の首を絞めている状況だ。おまけに温暖化、資源枯渇、テロや戦争の頻発と来ては、正に人類の生存システムに決定的な「疲弊」を来していると言っても過言ではないだろう。子孫や途上国の事など知らない。今の今、俺だけが豊かで安穩に暮らせればそれでよい、とする同時多発エゴだ。終末現象だ。

口先だけで、夢みたいなこと言つなと言われるかも知れないが、人口過剰と大量消費には急いでストップをかけないと、種の寿命は、必ず短縮される運命にあると私は信じて疑わない。我々の住んでいる社会構造に、決定的なシステム上の欠陥があり、現状に合わなくなつたら、これは勇気をもって改革しなければ、システムの維持はできなくなる。それとまったく同じことで、人口過剰と大量消費は、地球という母星が、我々人類を抱えきれず、悲鳴を発している状況下では、待つたなしで、なんとかして生存システムを変えないことには、人類の未来はない。

ナンセンスな夢物語と笑われるかもしれないがこの地球よりも1000万年ぐらい文明が先行している星の宇宙人が、チョイとこの地球をのぞき見たなら、我々地球人を見て、吹き出してしまいかもしれない。この星の人類とやらは、自分達

を、地球という「宿主」に寄生している「寄生虫」だということ、いまだに認識していないノータリンの愚か者だと軽蔑するであろう。宿主を傷つけ、再生不能に近いまでに汚染していることに、さっぱり気が付いていない。

愚かな寄生生物は、宿主を再起できないまでに痛めつける。宿主が死ねば、当然寄生生物も死ぬ。子孫を残せなくなる。ヒトに感染した狂犬病ウイルスは、百発百中ヒトを殺すが、自分も生きてはいけない。利口な寄生生物は、宿主に、わずかな栄養を分けてもらい、宿主にも、なにがしかの利益になるようなお返しをするものだ。即ち共生関係だ。地球の浄化能力にも限度がある。そのことをハツキリ認識し、ヒトと地球とは、共生関係を確実なものにしていかなければ、両者が滅びる。

今時の政府は、年金制度など、今の今が無事乗り切れないため、或いは選挙で集票できないため、人口を増やすことに腐心しているが、地球という母星の人口を養う収容能力には限界がある。水や空気を汚さず、子孫が平穩に暮らせる人口は、一体どれぐらいが適切なのかを、大所高所から冷静に判断し、全世界が一致協力してコントロールしなければならぬ。

私に言わせれば、適切な我が国の人口は、縄文時代と同じ10万人ぐらいが、喧嘩や争いが起きない適正規模と考えている。世界人口も670万人だ。現人口の千分の一だが、テリトリーの重ならない、正に適正な密度ではないか。現在の石岡市の人口を8万人とすると、80人は正に適正な規模であり、数家族20人ぐらいの小集団が、石岡・八郷地区にパラパラと、計4箇所ぐらいに集落を形成する。この密度なら、ケンカのしようも

なかつた。人類が未永く繁栄を続けたいのなら、自然破壊を起ささない、人口を現在の千分の一に削減するプロジェクトに、早速着手すべきである。さて人口削減計画はともかく、日本では、BC

900年頃から、大陸での難民であつた弥生人が一気に100万人も押し寄せてきて、平穩に暮らしていた先住民の縄文人を虐げ、戦争に明け暮れる時代へと移行していく。まるで大陸での敗者復活戦をこの日本列島でぶり返しているみたいだ。そしてこの狭い国土に群雄割拠し、戦国時代へと突入し、欲の皮の突つ張つた者同士が際限もなく、戦に明け暮れる列島と化していく。

以上、人類の種としての寿命を見てきたが、ここで動物の個体の寿命を見てみよう。

カゲロウ(成虫) 1〜3日。ネズミ 3年。ツバメ 9年。コヨーテ 15年。ヒキガエル 36年。ロプスター 50年。ワニ 60年。ゾウ 77年。シロナガスクジラ 80年。チョウザメ 100年。ソウガメ 150年。

そして2008年1月、アイスランドの海底から、Arctica-islandicaという名の生きた二枚貝が発見され、貝殻に刻まれた樹木のような年輪から、410歳であることが確認された。これが現在、ギネスブックに記載されている、世界最長寿の動物の寿命である。

一方、人間に関しては、122歳がこれまでの世界最長寿記録となつている。また植物では、北米のセコイア 4000年。メキシコハマビシ 11700年という記録がある。

また、長命の人には「長寿の遺伝子」を持った人が多いが、長寿の遺伝子がなくとも長命の人もいるし、長寿の遺伝子を持っていながら、早死に

の人もいるという。その訳は、栄養状態と深い関係があり、長寿の遺伝子は、栄養豊富だとその活動がブロックされ、その機能を発揮しなくなるのだという。動物実験では、長寿の遺伝子を持ったマウスを栄養過剰状態にすると確実に短命となり、途中から栄養状態を普通又はやや少なめにすると明らかに長命に戻ったという報告がある。昔から『腹八分に医者いらす』と言われていたが、さもありません。

また、寿命ではないが、延命にかかわる、ある動物の、一編の寓話がある。

英国人は海鼠(ナマコ)が大変好きだという。近海ものは取り尽くし、やむなく遠洋にまで出かけるようになった。それでも比較的近い所からは、しばらくナマコを供給できたが、ある距離を超えると、途中、水を替えたり空気を送ったりしてもイギリスの港に着いてみると、ナマコは悉く死んでしまう。死んでは食感が落ちる。需要と供給のバランスが崩れ、大変困った事態となった。ところがある時、ある漁師が、遠洋で沢山取れたナマコの水槽に、偶然とれた蟹(カニ)と一緒に連れて遠路、港に帰ったところ、なんと、ナマコは全部生きていたというのだ。ナマコにとって、カニは最強の天敵である。この事から、生き物は、何の刺激もなく平平凡凡の環境なら、ちよつとした悪条件にみまわれると簡単に死滅するが、狭い所に天敵と同居などという事態になると、何が何でも食われまい・死ぬまいとして、生命力が強化されるのではないかと……。と紹介文は結んでいた。

なるほど……。近代史を振り返ってみると、戦中戦後の超食糧難の時代に、餓死する人なんて、そんなにいなかったような気がする。温室育ちの

エリート社員は、成績が上がらないなど壁にぶつかると、すぐ自殺。ところが一方、工場など、現場で、鬼軍曹に鍛え上げられた労働者の方が、ずっと逞しい感じを受ける。

住宅事情などもあるが、姑と一緒に暮らしたくはないとして、核家族が増えているが、子育てのノウハウも知らず、子供の反抗期も理解できず、育児ノイローゼなどの結末の記事をよく見る。かえって適当な文句を言ってくれる人がいた方が、自分も成長する近道だ。政治の世界でも、一々文句をつけてくる、うるさい野党がいた方が、与党も腐敗せず、選良の自覚を持ち、国民のため、住民のため、滅私奉公する気になるだろう。

私など、原稿の締切りという切迫した事情がなかったら、超ノホホンで、好き勝手なことに夢中。ただウダウダと日々を過ごしているに違いない。駄文とはいえ、毎月の約束があるから、その気になつて頑張っている。お陰様で健康も頂いている。

日頃だれでも、緊張感を持続し、あれやこれや創意工夫を重ねながら、難局を乗り切る。棚からボタモチは、めつたに落ちてこない。命がけで、自らの道を拓く。それが長寿の秘訣かもしれない。

更に拡大解釈するなら、近年、抗菌加工の色々なものが販売されているが、これぞまさに無菌室の温室育ちと同じで、抵抗力のない肺抜けを育てる。人も動物も、色々な雑菌に曝されて、ブースター効果をすれば、かえって病気になる強い免疫ができる。キレイ好きの弱点を巧妙に突いた、悪徳商法だ。惑わされないよう、ご用心あれ！

ついでに嗽(うがい)の話。外出から家に帰ったら先ずウガイを。というが、ヨード剤などでガラガラやると、口腔に棲む常在菌をも殺し、かえ

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末(最終土曜日)に勉強会を行っております。入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063 打田昇三 0299-22-4400  
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」

URL:<http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ってカゼ症状を悪化させる。ウガイはただの水道水でやればよいのだ。常在菌は、ただそこにいるだけで、他の悪い細菌が侵入するのを防いでいる。

また、臍、耳、鼻、膣など乳酸菌という先住民がいるからこそ、あとから来た悪い細菌やカビなど定着する余地はない。それ故、医師は、病原菌と常在菌とのバランスを考え、むやみやたらな抗生物質の投与を処方しない。病気は自らの体力で直すもの。時と場合にもよるが、薬を止めたら、急に体調が良くなったという話さえある。

結局「寿命」というものは、種としてあれ、個体であれ、遺伝的なものはかなり大きな位置を占める。しかし、環境に配慮した、日ごろの生活態度も、非常に重要であると私は信じている。

# ふるさと風の会&ことば座

## 3周年記念大会

2009年10月13日～18日 ギター文化館

ふるさと風の会は6月で、ことば座は10月で3周年を迎えることが出来ました。

つきましては10月13日～18日まで、ギター文化館様のご協力を頂き「風の会」「ことば座」合同で、記念大会を開催いたします。

風の会では3年間の足跡をご紹介しながら、ふるさと活動としての成果である会員の主張をまとめた小冊子をはじめとして、兼平ちえこの「風のことば絵および常世の国の五百相」展、ことば座の協力で創作ふるさと物語の朗読、公開座談会等を計画いたしております。

ことば座では、10月16日、17日18時30より3周年記念公演として「恋瀬川物語」「漆黒と雑木林と星たち」「緋桜怨節」を、18日14時より第17回定期公演「常世の国の恋物語第22話：閑居山磨崖仏秘話」をお届けします。

また、大会期間中には風の塾：絵と一行文教室および朗読教室の発表会も予定しています。

風の会、ことば座3周年記念大会に関する内容は、

本誌来月号にて詳しくご案内いたします。

ふるさと風の会編集事務局

315-0001 茨城県石岡市石岡13979-2(白井方) 電話0299-24-2063

永祿三年（一五六〇）の初夏に上洛を目指す駿河の守護・今川義元の大軍が尾張国へ侵入した。京都へ行く道筋だから通ったのだが、尾張には当時、売り出し中の織田信長が居た。「今川だか鯛焼きだか知らないが、俺の領土に侵入する奴は許さない！」と部下を集めさせて数えたら三千しか居なかつた。重臣の林佐渡守たちが「敵の数は四万だそです。このまま戦っても勝ち目は有りませんから、清須城に立て籠もりましょう」と言うのを聞かず、信長は野戦を決意して先ず熱田神宮へ参拝してから桶狭間へ向かい勝利を手にした。

後で調べたら今川の軍勢は二万五千だったので政治資金と同じように慌てて修正するかと思つたのだが、四万の軍勢説は変わらない。織田信長の方は正直で三千を五千に修正している。実は多いほうの数字が軍の総員で、少ないほうは実際に合戦をする戦闘要員の数らしい。戦争というのは何かと手間がかかる。と言うより戦士も生きているうちは食事も摂り装備も必要なので補給が絶やせない。武器弾薬や燃料、飲料水、医薬品など必要な物資は多く後方支援が絶対不可欠なのである。

今川義元は織田信長の抵抗を予想して清須城に近づく前に兵たちに休憩を取らせる心算で桶狭間に来たのであり、「小荷駄」と呼ばれる裏方の者たちが飲み物などを配っている最中を襲われた。

信長の少し先輩になる武田信玄は、大軍でも少数の敵に敗れる理由として十五項目を挙げておりその中には「スパイ活動で情報戦を行わなかつた場合」、「気候や地形に配慮しなかつた場合」、「陣の敷き方が良くなかつた場合」、「敵を見下して油断し

た場合」などがある。桶狭間の今川軍は正にその状態で敗れた。そして十五項目の中には「味方の食糧輸送計画が無かつた場合（後方支援（小荷駄）の不備）」も記録されている。（甲陽軍鑑）

戦場に向かう本隊には、かなりの人数で大荷物に伴つた小荷駄隊が従つていた。関ヶ原合戦を前にして美濃国不和の関では戦場への道が混雑するため「小荷駄は本道に留めないよう」に徳川家康が触れを出した記録がある。戦国武将も後方支援を戦略に加えていたのに、明治維新の新政府は戦闘だけしか考えずに頑迷固陋な軍隊を創つた。

昭和六十年代に「日本近代史」が専攻だつた茨城大学の大江教授が「日本の参謀本部」という本を書かれた。その中に「研究不足の兵站（へいたん）」という項目があり、日本の軍首脳部が日露戦争まで兵站（後方支援（小荷駄）を無視していた事実を指摘されている。日露戦争以降も感覚的には変わらなかつたのであろう。アメリカ軍などは写真部隊、郵便部隊から死体処理部隊まで驚くほど多様な組織で戦闘要員を支援している。日本は何でも「大和魂」で済ませていたのである。

陸軍では昭和六年まで兵士のことを「兵卒」と呼び差別していた。ところが、それは未だ良い方で兵卒とも呼んで貰えない立場の軍人が居たらしいのである。それが後方支援に当る兵士たちで、その兵科は「輜重輸卒（しちよつゆそつ）」と呼ばれ「輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々トンボも鳥のうち。」などと軽視されていた。歪んだ体質の軍隊では重要な任務の者ほど酷い仕打ちを受けた。

諺にも「腹が減つては戦が出来ぬ」と言うが、兵站物資で重要なものは食糧である。合戦に臨む場合には予め食事を済ませ、戦闘が長引くような

らば非常食と水を携帯する。関ヶ原合戦の当日に朝早く起きた徳川家康は「湯漬け」をかきこんで戦場へ向かつた。総大将がこの程度だから兵卒は固い「干し飯」を腰にぶら下げて走つた。馬の餌は草で済むかも知れないが、武将の為に換え馬が必要なのでこれを連れて行くのも一苦労である。

何百、何千の単位でさえも軍隊が遠征するのは大変なのに、何万から何十万の軍勢を遠くギリシア本土まで遠征させたのが、王位継承に疑問があるとされるペルシア帝国のダリウス大王である。前号（参の章）で述べたように、王妃の乳房の腫瘍を治した医師デモケデスと、都市国家アテネから流れて来たヒッピアスが唆したようだが遠征するには相当の準備と費用が要る。

ところがペルシア軍は膨大な軍事予算を計上していたのか、嘘のような話がある。ペルシアの艦隊が敵の船団を見つけた。ギリシア軍陣営に武器食糧などを届ける船らしい。報告を受けた指揮官は「その船は何処へ行くのか？」と訊ねた。幕僚が「我々が攻撃に向かう戦線の方です。」と答えると、指揮官は「それならば行き先が同じではないか。放つておけ！」と答えて悠然としていた。

高級将校の警沢も「戦場」の概念を越えていたものらしく、遠征後半のことになるが紀元前四七九年六月にペルシア軍が負ける筈の無い戦いで負けてギリシア征伐を諦めた「プラタイア（アテネの西北、コリント湾岸）の会戦」では、総指揮官のマルドニオス（ダリウスの義弟）が戦死しペルシア軍は慌てて撤収したので高価な調理器具など戦場とは思えない道具類や宮殿内と同じような調度類が放置された。それらはギリシア人が見たことも無い豪華な金銀で出来ているものが多かつた。

取り残されたペルシア兵士もいたが、その大部分は料理人など後方要員だったという。そこでギリシア軍の指揮官が料理人に命じて先ずペルシア料理を作らせた。それからペルシア人にスパルタ軍のレシピを示してギリシア軍隊料理を造らせ両方を比べてみると、食べてみる迄も無くギリシア料理がひどく粗末に見えた。両方の差が余りにも甚だしかったのでスパルタの將軍はギリシア人の諸隊指揮官を集めて両方の料理を見せ、「このような豪華な食事をしているペルシア人が、なぜ貧弱な食事しか出来ない我々から奪いにやってきたのか：馬鹿では無いのか：」と言って呆れた。

スパルタの將軍が言ったように、狙われたギリシアは資源が少なく土地も瘦せ国家としてはバラバラで、大部分の民が本土、地中海・エーゲ海沿岸部や大小の島々に住民都市を築いて商売に精を出している。大帝國ペルシアには毒にも薬にもならない存在であったが、莫大な予算を使って其処に攻め込んだのは、女王様のおねだり以外にも一方的だがそれなりの理由があったらしい。

その最大の要因と考えられるのがギリシア圏で起こったペルシアへの抵抗運動である。遊牧騎馬民族スキタイの征伐に失敗したとは言っても二十年前にはダリウスがペルシアの大軍を率いてギリシアの奥地へ来た。その結果、トラキアは占領され隣のマケドニアは何とか誤魔化して服屬国にして貰っていた。ギリシア本土に來られては困る。

都市国家の指導者たちの心配に答える形で反乱を扇動したのが、前号末尾で紹介したミレトス市前僭主のアリスタゴラスである。しかし実際にはペルシアに尻尾を振って「儲かります」と始めた計画の失敗を誤魔化す手立てで思いついた反乱で

ある。その失敗とは、エーゲ海中央にあるナクソス島で起こった内紛に介入してペルシア軍にも損害を出させてしまったことである。この出鱈目な男に壮大な計画が立てられる訳がない。

例によってヘロドトスは、アリスタゴラスに対してペルシア帝國への反乱を示唆したヒステイアイオスという人物を紹介している。この男はアリスタゴラスと同様に反乱の拠点となったミレトス市の僭主だったようで、参の章で述べた二十年前の遠征に際してダリウス大王に協力をしていた。

ボスボラス海峡を渡河する仮橋の架設に功績が有って表彰された人物なのである。結果的にはその協力も遠大な野望の為だったことになるが：

ダリウスは恩賞として本人が希望する領土をトラキアに与えていたのだが：或る日、トラキア駐留軍の司令官を命じられていたメガバゾス（ダリウスが最も信頼する武將）が密かにダリウスの許に來て重大な忠告を行った。その時、ダリウスは首都のスサからサルデイスまで遠征していた。ダリウスに人払いを要請したメガバゾスは開口

一番「王は海峡に仮橋を架けた功績でヒステイアイオスに領土をお与えになりましたが、あれは問題になると思います！」と言った。ダリウスは少し機嫌を損じた様子だったが、相手がメガバゾスなので黙って意見を聞くことにした。メガバゾスは声を落として、先ず次の点を指摘した。

ヒステイアイオスが、トラキアに貰った領地に城壁を巡らし始めたこと。これは何か陰謀があるからではないのか？

トラキアは野蛮な土地と思われるが木材の産地であること。この木材は船を建造するのに使われるが、トラキア産の樹木は固いので船の

權（かい）に適していること（当時は船舶用工ンジンが無かったから權は重要であった）

未だ余り知られて居ないことだがトラキアには有望な銀の鉱山がある。それがヒステイアイオスの領地に近い場所であること

銀山の周辺にはギリシアからの移住民が増えており、もし彼らが有力な指導者を得れば大規模な反対勢力となる恐れがあること

「…このような状況ですから、ヒステイアイオスはトラキアに置かず、大王の眼が届くところでお使いになられたほうが良いと考えます。そして再びギリシアへは返されませぬように…」

ダリウスはこの建言を受けて直ちにヒステイアイオスに使者を送り、使者は尤もらしく述べた。

「ダリウス大王からヒステイアイオスに告げる王の周辺を見回しても、誠心誠意ペルシア國王とペルシア國家のために尽くしてくれる異國人の家臣はそなたの他にいないと思われる。それは多くのことに依って確かめられている…私は或ることを決意しているのだが、信頼すべきそなたには私から直に伝えたいと思うので都合が付き次第に海峡を越えてサルデイスまで來て貰いたい…」

これを聞いたヒステイアイオスは、自分が國王の特別補佐官にでも任命されるものと錯覚してトラキアから飛ぶようにしてやって來た。ダリウスは待ち兼ねたように玄關まで出迎えて言った。

「ヒステイアイオスよ、良く來てくれた…実は、急に呼び出したのは、このところ良き話相手に恵まれなかつたからで、そなたのように才智があり、かつ忠誠心に溢れた異國人で、然も友人のような家臣というものは実に大切であると気付いたからである…私はスサの宮殿へ歸るが、そなたが常に

私の近くに居ていつでも相談にのってくれることを願っている。ヒステイアイオスよ、どうかトラキアの領地や故郷ミレトスのことをきっぱりと忘れてスサに行き、私の相談役になってくれ。そのかわり、私の財産は自由に使って宜しい。」

ダリウス大王は、それだけ言つとヒステイアイオスが発言する間も与えず、待ち兼ねた割には実にあつさり奥の方へ引き上げてしまった。このギリシア人は、否応なくベルシアへ帰るダリウスのお供をさせられ、暫くは異国で何不自由の無い不自由な生活を強いられることになった。

既に序章と参の章で触れたように、ベルシア帝国が最初に屈伏させた金持ち王国リュディアの首都サルデイスでは、出稼ぎに来ていたギリシア系のイオニア人住民が表向きは消費税の引き上げに反抗して(裏では扇動されて)暴動を起こし、それには無関係だった現地住民が信仰する神殿にも暴動の火が移ってしまった。

サルデイスの住民はベルシアに占領されている訳だから、反乱に参加しないまでもイオニア人側を好意的に見ていた。しかし暴動の火で神社が焼かれたとなると立場が変わってくる。特に祭神が女神様となれば氏子のオジサンたちは愛人の家が焼かれたように怒り出した。暴動も選挙と同じで地元から見放されたら終わりである。イオニア人の反乱は失敗に帰した。

然しながら、この事件の影響でベルシアの占領に対するギリシア系住民の反発が増えたことは自然の成り行きであり(それこそ扇動者の思惑であり)地中海、エーゲ海沿岸諸都市などに小規模な反乱が続発した。ダリウス大王は、服従させたフェニキア海軍の主力艦隊を使って海側から

攻めかけ、ようやく暴動を制圧した。

反乱に加わった諸都市の中で最後まで健闘していたのが、どこかの国の総理大臣から「怪しげな株屋!」と言われた部類のアリスタゴラスが率いるミレトス市である。サルデイスの暴動に始まる一連の反乱はこの株屋が扇動したものとされているから最後まで頑張るのは当然だが、そして背後で糸を引いていたのが、ダリウス大王の身近に連れて行かれたヒステイアイオスなのである。

ダリウスが最も信頼する武将メガバゾスが暇んだとおり、トラキア地方で一旗揚げようと準備していたのにベルシアの都へ住まわされ、大王の眼から逃れられないヒステイアイオスは、何とかして地元で「反ベルシアの抵抗運動」を起こすことが出来ないか思案を巡らせていた。そのような折に都合良くサルデイスの事件が発生した。

ヒステイアイオスは、自分の後にミレトスの僭主になったアリスタゴラスが小物だが「悪役」に相応しい人物であったことを思い出した。この男を煽れば何かを仕出かしてくれる。しかし相手は遠く離れた場所に居る。どうやって連絡をとるか?ヒステイアイオスは、或る方法を思いついて信頼の出来る奴隷を密かに呼びだした。

ヒステイアイオスは多くの金品を与えて奴隷の頭の毛を剃り、そこに入れ墨をして暫くは隠れているように命じた。数十日が経って元通りに髪が伸びた奴隷が姿を現すと、ヒステイアイオスは更に多くの金品を与えて密かにミレトスへ行くように命じた。回りでは奴隷の一人や二人が急に見えなくなつても気にする者は居ない。

ミレトス市は、エーゲ海の東南部に浮かぶサモス島(現在はトルコ領になっている)から数十km

離れた対岸にあり、沿岸部ながら川と湖に護られる要衝の地に位置していた。黒海方面の商売を独占して羽振りが良いので「イオニアの女王」と呼ばれ、有力な都市国家であった。アリスタゴラスは其処に君臨していた。

ある日のこと、頭髪から髭まで伸び放題の男がミレトスの城にやって来て「親分に会わせる。」と言った。長旅も想像されるが、身なりが立派では無く、顔に深いしわがあつて苦勞が滲み出ているから奴隷だと想像がつく。門番が追い返そうとすると「俺はベルシアから来た!」と言つので門番は恐れてアリスタゴラスに報告した。

アリスタゴラスも「ベルシア」という言葉には敏感になつていたので、不審そうに顔を出した。奴隷は近づいて来て「自分はスサの宮殿から来た奴隷だが、まず長旅で伸びた髭と頭髪を綺麗に剃つて貰いたい。」と、ヒステイアイオスから命じられただけの奇妙な注文をした。アリスタゴラスは「何かある!」と察して周りの者を遠ざけ、理髪店には嫌がられるが、自分で奴隷の頭髪を切り丁寧に剃りあげてみると、奴隷の頭には「反乱蜂起すべし」とギリシア語の入れ墨があつた。

このようにしてサルデイス市に続くミレトス市の対ベルシア反乱が開始されたのである。金ピカのサルデイスには及ばないが、裕福なミレトスには武力も整っている。しかし、アリスタゴラスは念の為に同盟を結んでいたギリシア本土のアテネ市と、エウボイア島(エーゲ海西端)のエレトリア市に援助を要請して双方合わせて二十五隻の軍船を派遣して貰うことにした。

ベルシア帝国に対抗するための、反乱の域を越えるような軍力が整い、ミレトス、アテネ、エ

レトリア各市の陸海軍を揃えた軍勢は、各地で暴れて紀元前四九五年にはベルシア軍と本格的な海戦まで展開している。これに刺激された暴動の火の手はマルマラ海沿岸部からクレタ島など各地のギリシア系殖民地に及んだ。

反乱軍主力はベルシア軍西方拠点のサルデイスを落とす勢いであった。ところが、今度も戦場で火災が起こり、熱くて戦争どころではなくなつた暴徒たちは海岸に停泊中の船まで退却を余儀なくされた。そこをベルシア軍に反撃され壊滅状態になつた。紀元前四九八年頃のことと推定される。

反乱の主役ミレトス市の敗北は、各地で元気に活躍していた「反ベルシア運動」の戦士たちに大きな失望と衝撃を与えた。良く考えてみると多少の不満は有つたが、自分たちには大国ベルシアを敵に回して戦つほどの勇氣も資金力も無かつた。ミレトス市のペテン師アリストタゴラスに騙されて暴動を起してしまつたのだが、負けたとなると、どの様な「ベルシアのお返し」がくるか？

アリストタゴラスは負けた途端に姿を消したが、各地を逃げ回つてから奥地のトラキアで現地人と紛争を起こしペテン師らしからぬ死に方をした。自分がペテンにかかれて殺されたのだという。

反乱事件の詳細な報告は、サルデイス駐留軍からスサ王宮のダリウス大王に知らされた。アリストタゴラスが各地の有力者を勧誘したことも明らかになつたが、ダリウスは今回のような大規模な反乱が、お調子者のペテン師一人の発案で出来る訳が無いと睨んだ。背後で扇動した者が居る！

しかしダリウスは、その詮議は後回しにしてギリシア本土のアテネ市とエレクトリア市がミレトス市に援軍を差し出したことを重視したのである。

スパルタ市は「ベルシアの都まで三十日」と聞いて援軍を断つてはいたが、ギリシア本土の都市国家を放つては置けない。ダリウス大王はベルシア帝国の威信にかけてギリシア征伐を決意した。

紀元前四九二年、フェニキアの港を出港したベルシア艦隊は数百隻と推定されている。この船は当時の原子力エンジンにも相当する「三段權船」である。つまり原子力みたいな顔をした奴隷たちが三段に分かれて權で漕ぐから馬力がある。

フェニキアは地中海東岸、現在のレバノンに都市国家を形成していたアラブ系海洋民族で、ギリシアを凌ぐ商売をしていた。早くからベルシア帝国に降服して御用船団になつており、ダリウス大王は「省エネ政策」からと「輸送のスピード化」を図るため兵員と物資を海上輸送に切り替えた。

地中海東部からトルコの南岸を通つた船団はロードス島辺りで北上し、反乱が収まつたミレトス市を横眼に見ながらマルマラ海がエーゲ海に抜けるヘレスポントス海峡で陸軍の一部を下ろした。

陸軍はベルシア領とも言えるトラキアを抜けてマケドニアに進んだ。吉の章で触れたようにマケドニアの王家はベルシア帝国に服従はしていたが領土を占領された訳では無い。陸軍は曖昧だつたマケドニアの主権を確認するために西進した。

主力の海軍はトラキア沿岸部を監視しながら、ギリシアの地図を見ると上(北)のほうに三本指がエーゲ海に突き出たように見えるカルキディキ半島のアトス山麓海域を南下していた。そこで思いも寄らぬ大嵐に遭遇し約三百隻の艦船が切り立つ断崖絶壁の付近で粗大ゴミになつた。現代の海難事故のように油漏れや原子力汚染は無かつたものの生存者も無かつたと考えたほうが良い。

その頃、陸上部隊は三本指半島の付け根辺りにいた。吉の章で登場したギリシア第二の都市テサロニキまで進んでいたようである。そこがトラキアとマケドニアの境界である。マケドニア人の出方を探りながらテサロニキの湾内で艦隊と合流する予定だつたと推測される。そこへ飛び込んできたのは「艦隊全滅」の一報である。さてはギリシアの大軍が出現！陸軍に緊張が走つた。しかし急に天候が悪化して嵐に襲われただけ、と聞いて砂漠住民のベルシア人は信じられなかつた。

実はトラキア東部が接する黒海は気候変動の激しい海であり、時ならぬ深く黒い霧や急な嵐で航海が危険に曝されることで知られていた。尤も日本では神聖な筈の黒海ならぬ国会で真っ黒い霧が年中出ているからトルコやギリシアに負けなさい。事前偵察をしたベルシアには、氣象予報が秘されていたのかも知れない。現在のイスタンブールでも急に天候が崩れることがある。ベルシア陸軍はマケドニアで反転してサルデイスまで引き上げてきた。聞こえは良いが逃げてきたのである。

戦争は理屈では無いから政治家の質は悪くても平和を希求する日本で暮らしていると「なぜ？」と思つことが多すぎる。ギリシア本土のアテネ市とエレクトリア市を攻撃する筈のベルシア軍が何故に陸軍をマケドニアに回し、艦隊を遠回りさせたのであるうか？実に不思議である。ロードス島からミレトスに寄港させて一息ついてから一気にアテネなどへ攻め込めば済むことである。

何度も触れているが当時のギリシアは都市国家単位であるから市町村ごとに軍隊を持ち、それが或いはベルシアの傭兵となつて稼ぎ、アテネ市やスパルタ市のように元氣な都市は大国とも戦争を

する。遠回りに攻めずに各個撃破で良かった：

しかしダリウス大王には、そういうみみつきい考えは無かつたようで、最初の失敗でギリシア遠征を諦めた訳ではない。艦船の二百や三百、兵員の五万や十万が失われても強大なペルシア帝国には全く影響が無いのである。戦時中の日本軍首脳はそれを真似て大損害でも、我が方の損害は軽微だと嘘をつき通した。それだけでも戦犯である。

ほぼ二年間の準備でフェニキア海軍に艦船六百隻を揃えさせたダリウス大王は、総司令官以下の人事も一新して第二次遠征軍を繰り出した。騎兵隊用に馬の輸送船まで揃えたと記録されている。陸軍の兵員数が戦闘員だけでも二十数万となっているが、スーパーでも値引き合戦があるから実数をどのくらいにしたら良いものか？迎え撃つアテネ市側の連合軍が一万なのでバランスを考えて二万くらいにしている歴史書もある：

前回は無駄な迂回で大きな損害を出したので、今回は「大王に遠征を吹きこんだ」とされるアテネ人のヒッピアスが案内に加わり、前進基地ミレトスからエーゲ海を西進して真っ直ぐにアテネを目標とした。その途中でクレタ島に近いナクス島を焼き打ちしたので、周りの島々にあった中小都市は兵員二十万という数字を信じて最初から降服した。気分を良くしたペルシア軍は、まずエウボイア島のエレトリア市を血祭りにあげた。

アテネに比べれば小さな都市（国）のエレトリアは、大事な軍艦をミレトスに貸してしまったから戦力の何割かが無い。ほとんど喧嘩にならない状態で町が破壊され焼き払われてしまった。住民は「追放された」説と「奴隷としてペルシアへ連行された」説がある。見せしめである。

「いくら物好きでも、世界一の大国ペルシアがギリシアの都市国家に大軍で攻め込んでくることはあるまい」と樂觀していたアテネの指導者はエレトリアの悲劇を見て、ミレトス反乱に加担したつけの大きさに愕然とした。更に悪いことに、ペルシア軍を案内しているのは自分たちが追放した前の指導者ヒッピアスである。アテネ市の裏金から国防の裏まで知っている。これ以上の強敵はいない。アテネ市は緊急の国防会議を開いた。

政治家というのは何時の時代も何処の国も同じなようで、ミサイルが飛んで来る緊急事態にも政治主導で先ず会議を開いてから物事に対応しようとする。この場合のアテネ市首脳部も自分たちの目前にペルシアの大軍が来てから「どうしたらよかるうか？」つまり降服するか、迎えて戦うか議論を始めた。和戦論が伯仲したがペルシアの事情に通じた或る將軍の意見で、海岸線へ迎え撃つべきだという意見が採択された。

実は、この將軍はつい最近までダリウス大王の下でギリシア人傭兵隊長として働いていた。身に覚えのないことでダリウスに疑いを掛けられたために、アテネ市へ逆亡命してきたばかりである。アテネがペルシアに無条件降伏しても、自分が許される見込みは無いので主戦論を主張した。

アテネの軍事力は海軍が主である。ペルシア軍は大艦隊を擁しているが、丘に揚がっては来られず陸軍が攻めてくる。相当な数だから助っ人が必要になる。陸軍の強い国はスパルタである。しかしアテネ市はスパルタ市と仲が良くない。

恥を忍び、ギリシア全土の危機という大義名分を看板にして「救援依頼の使者」がスパルタへ急行した。救援の対価は払う条件である。金さえ貰

えばスパルタ側は動く。ところが間の悪い時は仕方が無いもので、スパルタ市は町を挙げて九日間も続く祭礼の最中であつた。現代でも祭礼となると全てが優先されるように錯覚している自治体も存在するが、当時のスパルタ市がそうであつた。

加えて丁度、月齢が満月に近かつた。スパルタ市の決まりで満月を前に戦争には出かけ無いことになっていたので、救援依頼を受けたが数日の遅れになるという返事であつた。アテネ市は「ペルシアが来るぞ！」と周辺の都市国家に呼びかけ、西側のコリントス湾岸台地にある小都市国家プラタイアから陸軍一千を回して貰った。

さて、弱いエレトリア市を先に潰して怖さを強調したペルシア軍はそこから真っ直ぐに南下して狭い海の反対側にある小さな湾に上陸を始めた。標的のアテネ市から四十km以上も離れたアッテカ地方北部のマラトンである。アテネ市は反対側のサロニコス湾に面した港湾都市であるから、大艦隊が岬を回って海から攻めれば良さそうなものであるし、同じアッテカ地方でもアテネまで近い南部に上陸するであろうと予測されていた。

マラトン上陸は案内役のヒッピアスが提案した意見だとされている。アッテカ北部は現役時代にヒッピアスが選挙地盤にしていたらしく、ダリウス大王に良く思われた一心で地元の人たちにペルシア軍への協力を呼びかけた。日本でも落選したのに、「議員」などと看板を出しているから図々しいと思つたら小さな字で「前」と書いて誤魔化していた例がある。反省もせず自分の地盤だなどと思つのは選挙民を馬鹿にしている。ヒッピアスも相手にされなかつた。

ペルシア軍の兵力は数万から五、六万の単位だ

つたと推定される。前回の遠征では黒海の嵐で艦隊が全滅したけれども、陸軍は戦わずして引き揚げたから健在である。蟻のような大軍で補給体制も充分であり、兵力の少ないアテネ軍に負ける予定が無い。目的はペルシア帝国の膨大な軍事力を見せつけて服従させることにある。ギリシア人は傭兵として使つのに便利なのである。

マラトン湾の北には小さな岬がある。岬の付け根付近は沼地で北東側には塩の湖もある。ペルシア軍は、その地点に上陸したと伝えられる。沼地からでは上陸中に急襲される心配が無いからである。その場所で野営してから五、六km海沿いに南下して川を渡り、小高い丘に進出した。

目的がデモストレーションに近いから上陸作業も慌てずに、オリンピックの準備でもするつもりでゆっくりと、アテネ軍を威嚇するように何日も掛けて荷揚げを行い、丁寧に陣地を構えた。

アテネの陸軍は、桶狭間の織田信長では無いけれど自分の兵力を何度も数えて九千ぐらいいし居ないことを承知している。プラタイア市から借りた一千を加えても一万では勝ち目が無い。取り敢えずアテネへの街道に通じる要所のペンテリコン山と言つへんてこりんな場所に陣を張つて頼みのスパルタ軍を待つことにした。その場所はギリシア神話の英雄ヘラクレスを祀る神域であったから神のご加護が受けられるか、それとも神罰が当たるかはヘラクレスさん次第：スパルタ神社のお祭りとお満月の夜が早く終わるよう祈りつつ…

両軍がお互いを見通せる高地に陣を張り、無駄な睨み合いを始めてから八日ほど経つた日にスパルタから「祭りが終わったから救援に向かう」という連絡がアテネの陣地に届いた。スパルタから

マラトンの戦場までは直線でも三百km以上あるから一日や二日では来られないのだが、待ち遠しいアテネ軍は直ぐにでも強力な援軍が到着するものと錯覚したのである。

アテネ軍の指揮官はスパルタ軍の背後を背負つたような感じで中央陣地の兵力を薄くし、左右の陣を強固にする布陣に変えてペルシア陣営に近づいた。ペルシア軍から見ると、真ん中がガラ空きの敵陣が目の前にある。戦闘の原理からしても弱い部分を叩くのが常套手段である。ペルシア軍は自分たちの本来の目的を忘れ、学校で教わつたとおり襲いかかってきた。

双方の兵力差から考えても、これでアテネ軍が壊滅しペルシアの大軍が大勝利を得てギリシア全土が征服される：原則論からはそういうことになるのだが、織田信長が桶狭間の合戦で勝つたように「マラトンの会戦」でも歴史の神様は予想外の結末を創りだしてくれたのである。或いはマラトンのペンテリコン山に眠る武神ヘラクレスが同胞の誼（よしみ）でアテネ軍に味方した：

ペルシア陸軍の主戦力は騎兵と歩兵であった。この時も騎兵は来ていたが海岸地帯の戦場は狭い道が通じていただけなので思つように活躍出来ないし、たいした戦闘でもないから騎兵の出る幕ではない：軍艦の上で応援団に回っていた。

ペルシア歩兵の戦法は、先ず短い弓で一斉射撃を行つてから槍や太刀を振つて敵陣に突入する。騎兵と同時に攻めるから強力になるのだが、「今日は騎兵が休み」なのを忘れていた。兵力では絶対に勝ち目が無いアテネ軍が苦し紛れの作戦で中央部を手薄にしたところへ、何の躊躇も無く突つ込んで来たのである。弓の一斉射撃も行わずに：

アテネ陸軍は重装備歩兵であった。頑丈な鎧を身に付けているから動きは鈍いが鉄壁の護りを自慢にしている。突かれても斬られても中々怪我をしない。「何だ、これは！」手薄な中央部へ進んで行つたペルシア軍がもたつくうちに両翼のアテネ連合軍が襲いかかつてペルシア軍を叩き潰した。この状態を知つたペルシア軍の指揮官は慌てた。「ギリシア人はどうしてせっかちに戦争をしたがるのか？」自分たちが攻めて来たことを忘れてばやいてみても事態は不利になるばかり：「全員、艦船内に退避せよ！」と命令した。

戦国時代でも知られたことだが負け戦で撤収する際に最も重要かつ危険な任務が「殿軍（しんがり）」と言って、戦いながら最後に引き揚げる役目である。ペルシア軍もさすがに世界帝国だけに、この場合も選り抜きの精鋭部隊が「殿軍」に回り撤収作業を整然と行わせた。この部隊の戦死者は六千四百、調子づいたアテネ軍は艦隊にも攻撃を加えて七隻を破壊したが残る五九三隻は何事も無かつたように紺碧のエーゲ海へ去つて行つた。

アテネ、プラタイア連合軍の戦死者は一九二名であり、圧倒的な勝利である。一同が勝鬨を挙げている時に、やっとスパルタの救援軍が到着して「どうしたの？」という顔をしたが、事情が分ると丁寧な祝意を表して引き揚げた。

「マラトンの戦い」を心配して待ち侘びるアテネ市民に、奇跡的勝利を知らせるため、選ばれた兵士が山坂越えて四十二・一九五kmを走つたアテネ市民に「わが軍勝てり」と報告した兵士は息を引き取つた。それがオリンピックの花・マラソン競技になつた：と言つ出来過ぎた話はどうもウソらしい。伝令の二人や三人は走つたかも知れ

ないが、その場で倒れたのは心臓が悪かったか、AEDが備えて無かったからであろう。

アテネ軍は直ちにマラトン海岸から兵を退いて故国へ戻り、アテネ市の防備についたのである。一旦はエーゲ海に出たペルシア軍も、アテネ市を攻撃するために岬を回った。艦隊も陸軍も無傷ではないが、アテネ軍に比べれば圧倒的な兵力を保持している。港から攻撃する予定で近づいて偵察したところ、既にマラトンから帰還した陸軍が城壁を固め、アテネ自慢の海軍が海を護っている状況を見て強行を諦め、ペルシアへと引き揚げた。

近代オリンピックではマラソン競技の優勝者が最も華々しく称賛されるようだが紀元前四九〇年にマラトン海岸でペルシアの大軍を撃退したアテネの指揮官も一躍、名將と讃えられた。しかし功を焦り余計な作戦に失敗して不遇の中に没した。エーゲ海南部、クレタ海に近い島パロスの軍船がペルシア海軍に協力していたことを理由にアテネ市民を騙すような形で遠征して負けたのである。マラトンに出撃した指揮官は十人居たようである。だけ目立ったので潰されたのかも知れない。

攻めたほうのダリウス大王は、ペルシア軍の敗戦とまでは言えないまでも勝利には程遠い結果をトルコ西部の拠点サルデイスから前進基地のミレトスで聞いたと思う。前回は黒海の嵐にやられたので実際の戦闘は今回が最初になる。敵の領地へ踏み込んで戦うのであるから、二度や三度の手違いは仕方がない。艦船の十隻や二十隻、兵員の一万や二万は失っても国力に影響が無い。責任者を処罰し改めてまた攻めてくれば良い。しかしながら、この豪勢なペルシアの大王が次に勝つこともギリシア本土を攻めてくることも出来なかった。

「ペルシア帝国の大軍がギリシア本土を攻撃してアテネ・プラタイア連合軍に負けた。救援に駆け付けたアテネ陸軍が手を貸す気もなかった」というシヨッキングなニュースが世界中に流れると、それまで占領されていたペルシア支配の各地で反乱が起こったのである。特に抵抗が激しかったのはエジプトとバビロニアである。

式の章で述べたように、エジプト王国は紀元前五二五年にダリウスの先代にあたるカンピュセス二世に征服されており、エジプトの歴史でも第二十七王朝の王様はペルシアの国王が兼ねている。エジプトがエジプト人による王朝を回復するのは紀元前四〇四年、元気の良い地方豪族がたった一人で第二十八王朝を建てた時点である。

ダリウス大王はエジプト人に寛大であったと伝えられるが、それでも占領されていないほうが良いに決まっている。ペルシア帝国への反乱行動はナイル河下流域のデルタ地帯で頻発した。各地の反乱が鎮圧されるのが六年も先のことになる。

バビロニアの方は：これはカルデア王朝と呼ばれる第十一王朝（新バビロニア王朝）のことであるが：紀元前五三九年にペルシア帝国が滅ぼして首都のバビロンも完全にペルシア風にされており反乱が起きる要素は無いと思われていた。しかしこの都は紀元前二千年以前から「メソポタミアの神の都」であった。宗教的に根本から違つペルシア人に支配されることに対して神様が苦情を呈したのかも知れない。一応の反乱が起こった。

ギリシア遠征の損害も「蚊に食われた程度」と思っていたダリウス大王であるが反乱に手を焼いているうちに次の出陣を待たず死んでしまった。死因がマラリアだったかどうかは分からない。

## ギター文化館発「ふるさと文化市」

自慢すべき美しきふるさと「常世の国」と言い表された常陸国。この美しいふるさとに今欠けているものは、人の流れを創造しようとする知恵と情熱ではないでしょうか。この度、ふるさと常世の国を愛する仲間が集まり、この風土に培われてきた文化の力を持って「新しい人の流れを創造」しようと「ふるさと文化市実行委員会」を設立することとなりました。私達の暮らしのあらゆる側面において精神的な生活にかかわるものとして創造されたものの総称を文化と呼びます。そして文化とは、自分達の暮らしを主体的に考えることから生まれてきます。

暮らしと文化は、与えられるものではなく、自分達が考え創造する中にあるものです。ふるさとの暮らしに閉塞感や逼塞感を見たり、見てしまったりするのは、自分自身が自分の暮らしを主体的に考え、創造しようとしなからだといえます。この素晴らしいふるさとの中に、私達は主体的創造力を放棄した「仕方がない」という言葉を捨て、「方法はいくらでもある」と暮らしの夢、未来を主体的に紡いでいきたいと考えます。

ふるさと文化市実行委員会 《仮連絡事務所=いしおか補聴器0299-24-3881(担当:阿部)》

ダリウス大王の跡を継いだのは、正妃アトッサとの間に生まれたクセルクセス一世である。途中から大王になったダリウスは、先妻との間に男子がいてクセルクセスは長男ではなかったのだが、例によって後継者問題が起こったときに「父のダリウスが王になってから最初に生まれたのは自分だ！」と継承権を主張して即位したのである。

私は別に親戚では無いからどちらに覇を占める訳でもないが、ペルシア帝国の正統は王妃アトッサになる。国王は人物本位で選ぶべきであるうが、団栗の背比べなら糖尿病管理のようにけつとう値で決めるべきで、クセルクセスの即位は妥当だと思つ。ただ古代オリエント学のほうでは「この人物は無能では無いが狂信的で了見が狭い」と酷評している。超大国の王様がそれでは困る。

ギリシア征伐の途中で死亡した父親の意志を継いで…つまらないところで親孝行を思いついたクセルクセス一世は、ダリウス以上にギリシア遠征に拘ったのだが、支配地の反乱が長引き即位後五年経つてやっと自分が大王であることを世界に示すチャンスを得た。どこか見当違いだが…

紀元前四八一年、クセルクセス一世によるギリシア征伐の計画が発表された。この王様が先ず改善したのは遠征の規模である。父親が失敗した原因は規模が小さ過ぎたからだ（嘘だ！）と勝手に決め込んで、とにかく「大人数で相手を驚かそう」と今回は冗談では無く、貧困国ギリシア遠征のため百万単位の出兵が指示された。ペルシアの支配下にある四十六の民族に対して百七十万人の兵士差出が命じられたとする記録がある。そして何故か性懲りも無く、黒海の嵐にやられた最初のコースがまた遠征路に選ばれたのである。

## 《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦  
蕎麦会席料理のお店です  
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが  
皆さんをお迎えいたします。  
営業時間 11:30~15:00  
16:00~18:00  
月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

物語の降る里に!!

白井啓治

「突然ですが、…」

とオカリナ奏者の野口さんの奥さん(矢野恵子さん)から電話が入った。

「8月1日夜7時から、小美玉市の玉里しみじみの家で行われる『うさぎまつり』で演奏することになったのですが、時間がありませんでしたら…」  
と言つものであった。その電話をいただき、「へへ、まだ続けていたのだ」と少し驚きを思ってしまった。

この「うさぎまつり」が企画され始めたと同じ時期に、当「風の会」発足のきっかけとなった、ふるさとの文化を再生させる市民作家を育成する「民話ルネサンス塾」がスタートしたのである。その事が縁で、まつりを企画していた玉里村のまちづくりグループの人と話をしたことがあった。

そして、翌年の冬に、民話塾に創作された物語を朗読表現するために創設したルネサンス劇団シユワードが、同会に招かれて文化センターそばにある民家園で玉里村の物語などを朗読したのである。

った。

その後、ふるさとルネサンス活動は、推進責任者の責任放棄で頓挫することとなり、玉里村のみじみの村づくりの人達との交流もなくなったのであった。町村合併などで、うさぎまつりの活動もなくなったのかと思つていたのであったが、思わぬところからの情報で、活動の継続を知って嬉しい気持ちになった。

活動の継続を知って嬉しい気持ちになったというのも妙な話であるが、実際、この「常世の国」と呼ばれる地域一帯は、こちらの知る限り二・三の例を除き、文化にしろ経済にしろ継続した活性化活動を見ることがない。だから袖すり合つても…の縁ではあるが継続を知って嬉しい気持ちになったのであった。

うさぎの夏まつりは、本当にしみじみ過ぎるもので、元気に欠けるものではあったが、今年で5回かな、6回かな。その継続の中に、確かな物語の生まれている事が観とれた。

実行委員の人達がどれほど意識出来ているかは分からないが、小さなものではあるが夢・希望の道標となるべき物語が垣間見られたことは愉快なことであった。

さて、ここ数カ月ほど、事あることに言い続けてきたのであるが、「ふるさと」とは、暮らしの物語の「降る里」のことを言つと。そこで、物語の実態と物語の生まれる背景などについて考えてみたいと思つ。

物語とは「暮らしの希望(絶望)も等についてを人の心の葛藤の中に語るもの」である。

物語の「物」とは、物体をはじめとして人間の感知し得る対象のことを言つ。

物語とは、時の流れの中にある人間の葛藤を切り取って語るドラマだから、善事にしる悪事にしる、時の経過の中に劇しい(げしい)心の模様、葛藤(逡巡と洞察)がなければ語るものとして構築することはできない。

劇しさ、というのは事物・事象の捉え方によって生ずる感性のようなものであるから、劇しさを見出すためには、そこに継続された人間同士の関係の存在が必要である。継続された人間同士の関係が存在すると必ず、考え方や思いなどのぶつかり合いが生じ、それぞれの人の心の中に葛藤が生まれてくる。そしてこの葛藤が希望を生み出す基になるのである。葛藤を希望を生み出す物語にするか否かは、物語する人の感性にもよるが、葛藤の持つ未来に対する強さが問題である。直ぐに投げ出してしまふような弱いものでは、希望を作り込むことは難しい。

「ところでは、ふるさと」は「古里」と書いたり、「故郷」と書いたりするが、いずれも「ふるくからあるさと」という意味である。しかし、これを単なる「ふるい」ではなく、「十世代にわたって口に伝えられるもののある里」であるとか「ゆえ」わけ(理由)をもつている「さと郷」と解釈し説明する人もいる。成程、上手く漢字を解釈したものであると思うし、逆に上手く漢字をあてたものだ、とも思う。理屈はともかくとして、「ふるさと」とは暮らしを紡ぐに最適の地という事が出来る。

人が暮らすに適した地であって、そこに人々の暮らしが紡がれるとすれば、「ふるさと」には沢山の物語があり、語られる地であると言える。つまり、小生の主張する「ふるさと」とは、物語が生まれ、降る里なのである。

物語とは、人の暮らしの中に潜んである未来への希望の道標をドラマの中に紡ぎ込んで語られるもののことであるが、私にとつて希望の一番大きな物語が恋なので、ふるさととは恋の降る里であると声高に主張し、ことは座に書く舞物語も百の恋に挑戦している。

さて、物語の本質とは人の心の劇しさ(げしさ)である、と私は定義している。これは文章に書かれた物語に限らず、すべての表現に語られる物語とは絵であれ音楽であれ、感動を呼ぶ本質は表現者の心の劇しさであるといえる。劇しさの内包されていないものには、人は感動も共感もしないといえる。

自分の表現を発表することを、私は演劇と呼んでいる。写真展、絵画展、彫刻展、演奏会等々、総ての表現の場は演劇でなければならぬと、私は思っている。それは、演劇とは「劇しく己を演じること」だからである。

劇しくある為には、自分自身の中にドラマ、物語を持つことが必要になってくる。自分自身の中に物語を創るためには、己自身の裡を見つめ自身を考える姑息、卑猥でない未来のあるべき姿を描き、持つことである。

己の描く未来のあるべき姿を持った時、何かの事象の見聞や人に接した時、裡に劇しく新たな葛藤をもたらし、新しい物語が生み出されてくるのである。物語そのものは、文章や絵や譜面に書かなくても、その人の心に希望の道標の一つとして、しまい置かれるのである。

何だか解かるような解からないような話になってしまったが、要は、新しい物語が次々と生まれなければ、その地は滅んでしまふ。その地の滅び

の兆候は、先ず、伝承の物語が捨てられることから始まるので、町の人、村の人の中に伝承の昔話が聞かれなくなってきたら、黄色信号が点滅し始めたと思えばいい。

そして、次には、ふるさとについて今に都合のよいことだけを残そうとする。こうなったらもうふるさとの将来は、黄色から赤になってしまっていると考えた方がよい。

たかが物語。されど物語。ふるさととは、物語の降る里であると認識し、自分にとつて大切な物語を沢山生み、降らそうではないか。

見たせば 思い思いに ふるさとの風 ひろぢ

#### 編集後記

梅雨明けが宣言されたら、直ぐに取り消し。作物が日照時間の不足で出来が悪い。我が家の庭に植えたオクラの花も小さくて弱々しい。それにまだ実が小さいのに繊維だけが硬くみずみずしさが無い。エルニーニョだそうだが、この秋の実りはどうなるのだろうか。

編集事務局 〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ギター文化館発：ことば座第15回定期公演  
夏休み特集「ふるさと童話」

8月16日(日曜日)開演午後2時

「ふるさと」とは、たくさんの暮らしの物語が生まれ、降る里のことを言います。

暮らしの物語の芽は、日々の光や風の景(かげ)の間にたくさんかくれてあります。

「雑草だって目守(まも)れば花のきれい」 私達の暮らしの足元をちょっと目を凝らして  
見ると

感動の物語の芽がたくさんあることがわかります。 ことば座第15回公演は、親子で楽し  
めるふるさと童話を朗読と手話演技にお楽しみいただきます。

公演の最後に、小さなふるさと物語「一行文(一行詩)」を手話の舞表現に、皆で楽しみま  
しょう。

脚本：演出 白井啓治 美術(背景画)兼平ちえこ(装美)小林 一男  
出演：朗読・しらみひろぢ 手話演技朗読・小林幸枝

入場料3,000円 (前売券2,500円：小学生1,000円)

前売券は、ギター文化館 0299-46-2457 いしおか補聴器 0299-24-3881 で取り扱っております。

ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする教室

「風の塾」を開いています。(各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円)

絵と一行文教室 (講師：兼平ちえこ 白井啓治)  
詩を手話で舞う「朗読舞教室」(講師：小林幸枝 白井啓治)  
エッセイ教室 (講師：白井啓治)  
朗読教室 (講師：白井啓治)

入塾および教室の詳細は、下記「ことば座事務局」(担当：白井)  
電話 0299-24-2063 までお問い合わせください。